ラオスの農業（2）

藤原　昇

（五）ラオスの農業（続）

○ラオスの土壌及び気象

これらのラオスの農業を支えている様々な条件の中で特に重要だと思われる、気温、湿度、土壌等の問題について簡単に述べてみたい。

第七表から判る如く雨量は特に乾季は殆んど雨はふらないのであるが、矢張り地方によって少し異る。又これらは年によって大きく差があり、筆者の居た一九六七年の乾季は一滴も雨がふらず、青草が殆んど枯れてしまい牛が栄養失調の如くになっていた。しかし一九六八年になると三月頃から雨がふり始めて、十二月の帰国の月まで時折スコールが来たものである。

一方湿度の方も日中差がかなりあり、乾季の最盛期になると四〇％を割る時もしばしばであった（一九六七年の乾季）。

従ってビエンチャン近郊の気候は熱帯サバンナ乾湿気候とよばれている。

土壌については概して粘土質が強く腐殖が少なく（現在耕作している所）土地生産性は極めて低いようである。所謂タイーカンボディアゾーンの中に分類されるもので、粘土質砂岩であり、〃インドシニア〃と呼ばれる独特の土質を構成している。

それらの土壌の簡易分析の一例を示すと八表の通りである。

土の表面近くは酸性であり腐殖の少ない事が判る。従って今後は、有機質の田畑への投与によって土質を改良して行く事が必要である。特に乾季に於ては土中の水分保持（保水性の問題）がうまく行かず連日作物に灌水せねばならない状態である。しかし、これらの問題は土質の改良、即ち保水性を良くする事によって水分及び肥料等の利用を効果的に出来るものと考えられる。例えば牧草にしても、土性の改善によって匍匐性の作物を混作し、保水性を高めることによって更に高い植物生産が実現出来るものと思われる。

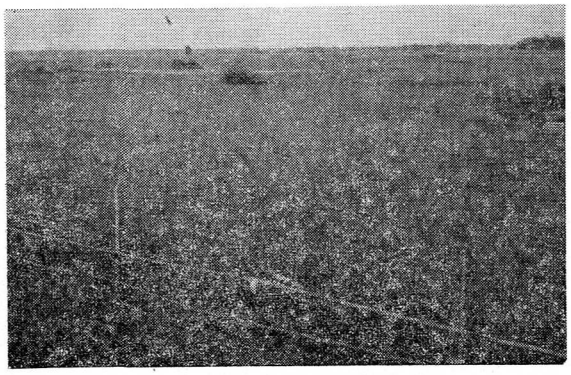
即ちラオスの農業は土壌の改良と灌漑設備の増加によって大きく前進するであろう。

○ラオスの農業教育及び試験研究機関

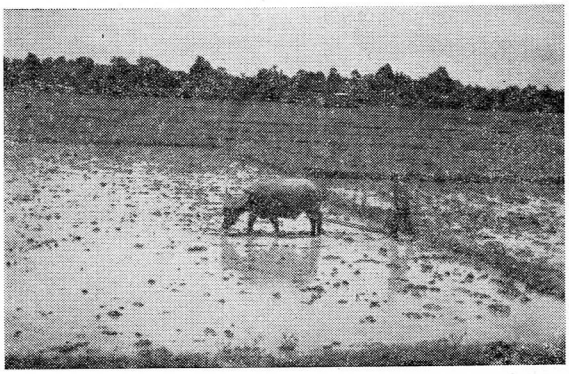
ラオスの義務教育が三年間だといわれている現状から農業教育はまだまだこれからだという感じであるが、首都ヴィエンチャンの南東一五㌔の所、ハドケオという地にF・A・Oの関係でイスラエルの援助によって行なわれている農業試験場があり、その中に農業学校が併設されている。ラオス

第7表　ラオスの気象（1964）

月別	雨量（インチ）	温度（°F）	湿度（％）
1月	0.1	69.8	70.0
2月	0.3	74.6	68.0
3月	0.7	80.4	68.0
4月	4.1	84.0	71.0
5月	10.9	83.6	80.0
6月	10.4	83.8	84.0
7月	9.6	82.2	83.0
8月	13.6	82.2	83.0
9月	16.0	81.2	85.0
10月	4.7	80.0	81.0
11月	0.1	77.0	77.0
12月	0.1	79.0	74.0
年間	70.6	79.1	77.0



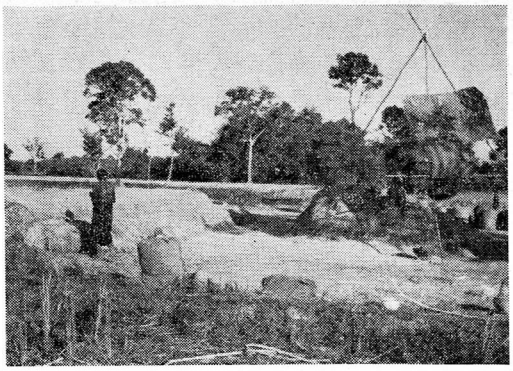
稲作試験圃（肥料試験）



水牛による代かき風景

第8表　土壌分析の一例（1965）

試料例	3A（0～3cm）	3B（12～15cm）
土の色	淡灰褐色	淡灰褐色
構成	砂質ローム	砂質ローム
P. H.	4.4	4.5
総可溶塩基	0.020％	0.013％
有効性P.	17 p. p. m	5 p. p. m
Ca me	0.22％	0.28％
K me	0.23％	0.11％



ラオスの稲積（脱穀前）風景

唯一の農業教育機関であり、そこは全寮制による二年間の教育で一クラス二五名の二年間で農業関係の教育、実験実習を行なっている。生徒は大体十五〜十六歳から入学が出来ることになっている。

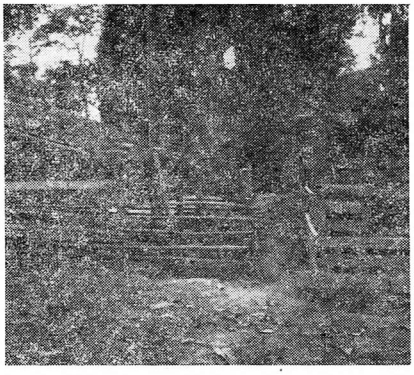
ここを卒業すると大部分は田舎へ帰り農業の技術指導者として活躍する。更に上級の農業関係の学校に進学を希望するものはリセー（フランス系の中等教育機関）を卒業する必要があり、それからフランスなりアメリカの農業大学に進学することが出来るのである。相当の困難が伴うようである。

又一方では、この農業学校からは進学は困難であるから、ラオスでは所謂、普通学校（日本の高校に同じ）の卒業生が、その資格をえて日本、アメリカ、フランス、カンボディア、サイゴン、タイ、その他ヨーロッパの各種農学校（農科大学）なり試験場等に留学して帰国後ラオスの農業教育及び試験研究機関に奉職し、各々指導的地位につくのである。

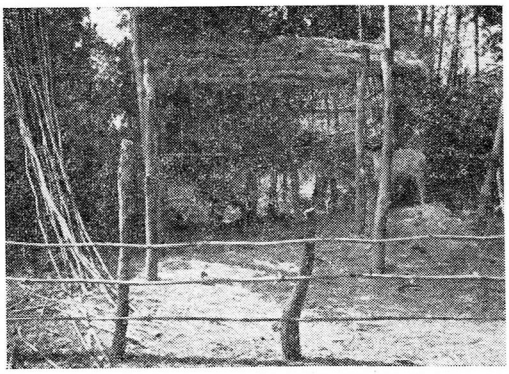
試験場関係は、ヴィエンチャンの東一五キロの所にサラカム稲作試験場があり、稲の育種と栽培法の試験等を実施している。

地方では、パクセ（南部ラオスの町）の北西にあるボロベン高原（標高一、二〇〇米余）に農業試験場（園芸関係）があり、主として果樹・野菜を中心に試験研究を行なっている。このボロベン高原は東南アジア第二の避暑地といわれる位の名所で、その冷涼な気候は農業に最適といわれている。日本的農業が展開出来そうな土地条件であり、今後の開発を待ちたい。既に、この附近では日本でとれる様な果物や野菜も十分栽培されており、特に南部ラオスの果物の生産は大なるものがある。

農村の稲の脱穀風景



一般農家の豚舎



小屋の床下で飼育されている黄牛

次に特に編集子からの依頼によって、前後の順序が異なるかと思うが、ラオスの民情、ラオスの交通状態、国際関係、日・ラオ関係等について少しふれてみたい。標記した〝ラオスの農業〟とは、少しかけはなれているが、少々御許し頂きたいと思う。

（六）ラオスの民情

ラオスには前述した如く、種々雑多な民族が居住している。近隣国からの流れ者や、以前から住みついた様々な系統の民族がいまだ起居しているのである。従ってラオス国内を旅行してみると思わぬ所で思わぬ民族に出くわす事も度々である。独特な民族衣裳は誠に印象的である。これらの民族間における感情的な問題は誠に平穏であるように思われる。特に外国人に対しては常に敬意を表わしているようである。

しかし海のない国ラオス、そこに住むラオス人、他国を想像する事は余りにも困難が多い、中には〝日本〟という名前すら知らない人達もいるのである。唯、ベトナム戦争の余波をうけて、ラオス国内でも内戦を続けており、パテト・ラオ（ラオス愛国党）の地域（領域内）に足を踏み入れる事は出来ないのである。従ってラオス国内を自由に旅行する事は、現在の状態では不可能であり、唯、重要な大都市をのみ旅する事が出来るだけである。

狭いラオス国土の七〇％はパテトラオ軍が占めているのが実情である。ラオス政府軍のテリトリーは誠に少なく弱いものである。従って大都市といえども数一〇キロ米も奥に入ると、そこは既にパテト・ラオ軍の領域内というのが実情である。誠に考えてみれば誠に危険な国のような気がする。

しかし、日本のジャーナルに云々されているにもかかわらず、実際にその国に長く

住んでいると、そんな事も余り感じられず平穏な日々の生活を人々は営んでいるのである。彼等は素朴であり、純真である。

仏教（小乗仏教）を深く信ずる彼等は血をみるのは特に忌むのである。従って彼等が行なっている内戦といえども、実を正せばアメリカの一人解釈かもしれないと思われるのである。パテト・ラオに居たという人にも逢った事が度々あるが、彼等は同じラオス人、兄弟・姉妹が、どうして戦う事が出来ようか？彼等はお互に真の平和を心から求めているのである。私は南ベトナムの一将軍の書いた書物の中で忘れる事の出来ない言葉がある、「我々は共産主義の下でも生きる事は出来る、しかし砲弾（爆弾）の下では死なねばならない」、という一文である。例えば、パテト・ラオといえども日本から協力に来ているのだといえば、彼等は、たとえ捕まえても、大目にみてくれるのである。先進国からの援助・協力によってラオス国、全土が良くなるのであり、それらは彼等も十分承知しているのである。

ラオスの人々は無類に親切である、共存共栄の精神にあふれている。たとえ一握りの〃にぎり飯〃でも、友人が来ると必ず〃たべるかい？〃といって二分して与えるのである――この精神は、今の日本においては、みる事の又はする事の出来ない、又は少ないことの一つであるように思われるのである。吾々は地方を旅して、野宿する事が度々あったが、必ず彼等は親切に宿を提供してくれるのである。田舎の簡単なニッパ椰子の葉でふいた如き小屋でも矢張り有難いものであった。彼等の生活程度は実に低いものではあるが、そこには真の人間の姿をみることが出来るような気がする。

東南アジアは汚職の天国といわれる位汚職がひどく、それがために貧富の差が著しく、公務員の連中は、それを知っているためか勤労意欲が欠如しているのが実情である。改善すべき事は、そういう行政機構の改革であるように思われる。メコン河をへだてたタイ側との差は実に大きいものがある。主食としている米でさえも、国内で十分に賄う事が出来ず、四〇％弱を隣りのタイ国から輸入しているのが現状である。国土の八〇％が未開拓の地であり、特に大河メコンを有効に活用するならば、この国はまだまだ発展するであろう前途洋々たる国であるように思われる。しかし彼等の労働意欲の欠如が大きなネックであり、恵まれすぎた自然環境が彼等をして発達を遅らせているのであろう。〃のどかな〃といえば〃のどか〃、〃はがゆい〃といえば、そうかもしれぬ、しかしこの超発達した物質文明の恩恵にも浴し、諸外国からの暖い援助に彼等が甘んじていることを思う時、彼等が民族を意識し、〃自主独立〃という精神を培い、立ち上がる日の一日も早く来ることを心から願うものである。

東南アジアの諸国は、唯単なるツーリストには感知出来ない、表面にではなく、裏面に固く潜む何かがあるのである。長い間そこに生活してみて、初めて彼等の人間性なり、国民性がよみとれるような気がするのである。これは単に、東南アジア、アフリカ諸国のみならず、アメリカやヨーロッパ等についても全く同じ事がいえるのではなかろうか。ラオスは、仏教（小乗仏教）を崇拝し、迷信がなお存続している純真な国である。

（七）ラオスの交通通信事情

ラオスは内陸国で海港がなく、貨物はバンコックで陸揚げされ、鉄道又は道路でビエンチャンに運ばれるか、サイゴンあるいはプノンペンで陸揚げされて陸路パクセ（ラオスの南部の都市）に運ばれるか、のいずれかの経路を経てラオスに持ち込まれるのである。

（イ）陸上交通

○鉄道

ラオスには鉄道はなく、タイ国の鉄道がバンコックからヴィエンチャンの対岸ノンカイとパクセの対岸ウボンに来ているにすぎない。しかし最近、このノンカイからヴィエンチャンの北東三〇〇キロ余の地、タケックまで鉄道を引くという話が出ているようである。しかし、今すぐという事は困難のようであり、時間の要る問題のようである。従ってラオスを旅する時は、所謂、日本の大型トラック（例えばイスズ、トヨタ、ヒノなど）を改造して座席を作り、窓なしのトラックバスで運ばれるのである。乾季の時などは赤土のモウモウたる砂煙の中を突走り目的地に着くと、目だけギョロギョロとした、まさに黒人の如くなるのである。勿論、大都市の市内は普通のバスが数、回数少なく走り廻り市民の重要な足となっているのが現状である。

○河川

メコン河が主要な航路であるが、カンボジア国境近くに東洋一といわれる、コーン瀑布があるほか、早瀬も多く、利用する者も高くないようである。

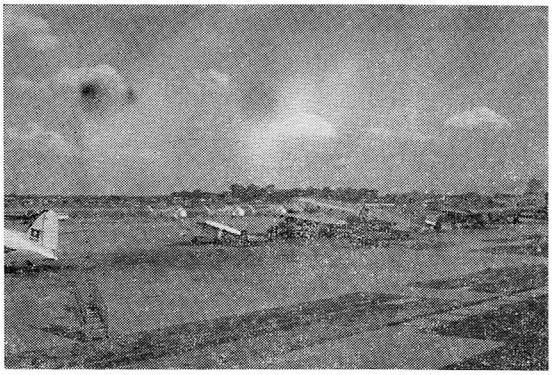
ヴィエンチャン以南のメコン河は二〇〇トン程度の船が航行出来るのである。しかし、対岸の隣国タイ国からの物々交換には、なくてはならない〃道〃であり、又旅をする場合でも是非共必要な〃足〃となっているのが、このメコン河の渡し船である。

海のない国にも、〃海軍〃があるのであるが、それはこのメコンの大河を利用して数少ない小船が、その大役を果しているようである。又雨期になるとものすごいほど水の量が増大し、人々の重要な交通路となっている、例えば、王都ルアンプラバンからヴィエンチャンまで七日間で下る事が出来るのである。しかし上りの場合は、その何倍という日数を要するのである。小船にはちゃんと、寝る事の出来る位の室は用意がしてあり、時間をかけてのぼるならば結構楽しいものである。

○航空

ヴィエンチャンに就航している国際空路線としては、バンコックよりタイ航空、サイゴンよりベトナム航空、ラオス航空、香港よりラオス航空、キャセイ、パシフィック等の諸線がある。

ラオス国営航空会社として、フランス航空系のラオス航空があるだけであり、その



ビィエンチャン国際空港

他の国内線としては、ラオ・エア・ライン、ラオ・エア・チャーター、ラオ・エア・ユナイテッド・エア等が国内の重要路線（ヴィエンチャン↔ルアンプラバン↔サヤブリ、ヴィエンチャン↔タケック↔サバナケット↔パクセ）を飛び廻っている。また、陸上交通の不便なラオスでは、航空輸送の重要性が大きく、エア・ラオスの他ウェア・アカ社は国内の不定期航空に、ヌエア・アメリカはブーヌ政府との契約に基いて奥地に対する（交通不便な処）補給物質の輸送に従事している。ヴィエンチャン以外には、ルアンプラバン、ナムタ、シェンククン、サバナケット、パクセ、アトプウに空港があるのみである。この空港も大地をそのまま利用する位の程度であり、草原の如く全くのどかな風景である。

○ラオスの道路

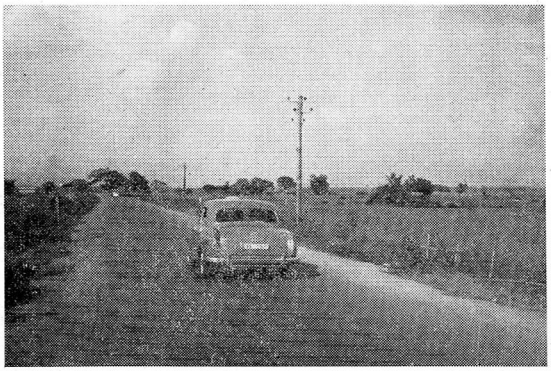
ラオスには国内開発のためにも道路を最も必要としているが、地形上の障害もあって未発達の状態である。一九六一年現在道路総延長は二、八〇〇キロ粁で、内四三八キロ粁はアスファルト、五五八キロ粁は砕石で舗装され、残余は雨期六ヵ月間は使用不可能である。メコン河畔の交通を阻害していたパクサン——タケック間の道路は米国援助で一九六五年五月に完成したものである。

又中共とプーマ亡命政権の協定に基づくモンラ（中共側）——ポンサリー間の道路は一九六三年五月に完成したものである。

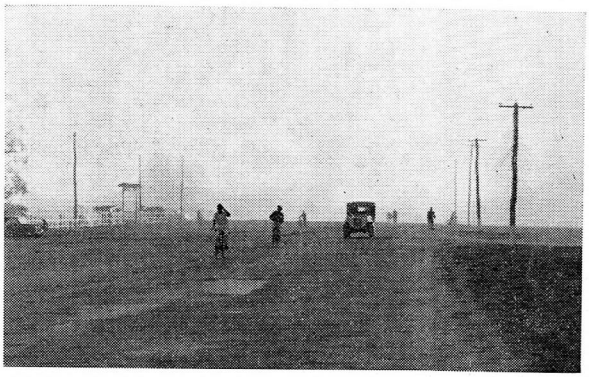
ヴィエンチャンとメコン河対岸のタイ領（バンコックから弾丸道路で八時間）を鉄橋で結ぶ計画があり、一九六八年十二月に、ラオスとタイの両国王出席の下に起工式が行なわれ、目下進行中のようである。この橋が完成すれば、主都ヴィエンチャンを中心に物質の輸送（流通）がスムーズに進み、文化も著しい勢いで進展するものと思われる。東南アジアの文化の発展をはばみ、その先進国との差の著しいのは矢張り交通の便の良悪によるように思われるのである。

吾々は方々を旅して歩いて見ながら、それをひしひしと感じたのである。

軍用道路でも良い、そこに道が開けることによって、そこら近辺はものすごい発展をするのであり、現にそういう地点があちこちにみられるのである。東南アジアの道路は吾々の想像より、はるかに良かったように思われた。しかしまだまだ〝道なき道〟を歩いて様々な部落に出くわすのである。



アスファルトの国道を走るタクシー



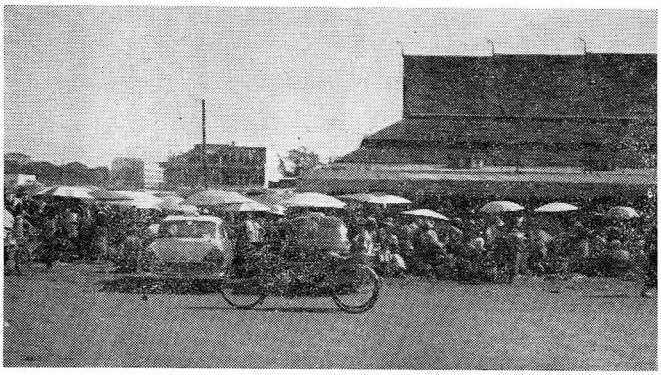
朝もやに煙るビィエンチャン郊外

吾々先進国もそういう意味で経済なり、技術なりの援助を強力に進める必要があるように思われる。

○〝ラオスの足〟

ラオスに来て最初に目につくものは、まず、朝、夕市場の風景と、そこに屯ろしている〝サムロ〟（カンボジア、サイゴンあたりでは〝シクロ〟という——東南アジア独特の自転車の後にリヤカーの小さいのをつけた如きもので客を後に二人のせて行く）の数の多い事ではなかろうか。

しかし又、このサムロなくしてラオスの人々の買物は出来ないといっても蓋し過言ではなかろう。一日～二日分の買物を手一



ラオスの朝市，タクシーとその前を走る〝サムロ〟

杯に持った彼等が、自分の家に帰るには（勿論市内が多いのであるが）まず、タクシーにのるか、このサムロを利用する以外には方法はないようである。重い荷物を持っては、とてもあの暑い中を歩く気にもならないのが、彼等の偽わらざる心の中であろう。そのサムロに乗って町の中を走ってみるのも又、風流で味なものである。彼等は本当に人なつっこくて、親しみ易い人間性をもっているから非常に面白く楽しいものである。親子二人で山ほど荷物を積んで、重たそうにサムロをこぐ人をみるのは又、こっけいでユーモアのある生活風情である。

吾々も良くこのサムロを、ラオス到着当初は珍らしいのも半分で利用したものである。値段を三倍もとられながら平気でだまされていたものだ。

しかし最近は、バンコック（隣国タイ）から多く流れて（いや登って来たのかもしれないが）来たタクシー、又はミゼット（かつて日本で多く走っていた車）が可成り多く入り込んで来たので、今度は少し遠くからの客をさばくのに大いに役立っているようである。それは又時間的に、人間が足でヨチヨチ漕ぐのよりもはるかに速いので利用者も多く（割安なのもあるが）〃サムロの喰いはぐれじゃないか〃などと口をたたく人もいるほどである。

又、市内を歩き廻る人のためには〃循環バス〃など走っており、一日中動き廻っているので、市内に住んでいる人は、それほど交通には不便を感じないのではないかと思われる。しかし一歩市外に出るとサッパリであり、何につけても〃乗合タクシー〃を利用する以外には手はないようである。しかも割安に利用することが出来るので人人の全く〃重宝な足〃という感じである。因みに、一九六一年現在、自動車総数は約六、八〇〇台であった。最近は特に多くなって来ているので更に増大しているものと思われる。又、自動車、自転車、オートバイ等は圧倒的に日本製品が多く、特にオートバイについては、その九九％が日本製品であるように思われる。

ラオスの田舎を走るバス

○ラオスの通信及び報道

ラオスの郵便局の数は僅か二五局、電話線はのべ八五キロ、電話番号数は七三六であった。国際電話は開通していない。

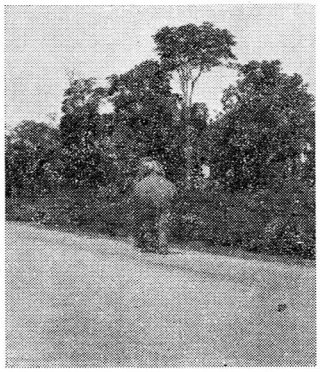
○新　聞

新聞らしい新聞としてはラオス語のものが三種類あるのみで、外国語のものとしては、情報省の発行するラオ・プレス（仏語、ステンシル版）のみである。華子紙が二枚あったが（タイプ印刷）最近中共の抗議で廃刊処分をうけたのでみられなくなった。バンコック発行の英字紙（バンコックワールド、バンコックポストなど）が割に多く読まれている。この新聞によって、世界の大体の動きは把握出来るので、特に外国人に多く読まれているようである。しかしラオスの現地の人達には、新聞よりもラジオによるニュースを聞く方が圧倒的に多いのである。

○放　送

国土が南北に細長いので、ラオスでは、各主要都市及び軍管区司令部にローカル・ラジオ放送局があるのみで、全国放送は行なわれていない。放送は国営（情報省）で、政府は外国援助（英、オーストラリア、ドイツ）で施設の拡充に努力している。

特にヴィエンチャンに於ては、朝、昼と夜の三回に亘り、一定時間（一五分～六〇分位）の仏語の放送（主としてニュース）が行なわれ、それによって日本の大体の動きは（大きなニュース）聞く事が出来るのである。未だ英語のニュースは行なわれていないが、連日〃英語講座〃がラジオで行なわれている。ヴィエンチャンではテレビもみられる（ごく一部で）が、ラオスには局もないのでタイ国のものが僅かにみられるにすぎないのである。



田舎道を人がのったゾウが行く

一方、ラオスの人々は、大都市を少しはなれると電気はなく、ラジオは全てトランジスターラジオであり、日本、タイ、オランダ等の製品が多く利用されていて、大抵の家に行ってもラジオの一台はあるのである。彼等は、これが唯一の楽しみであり、大きな娯楽の一つになっている。

ラジオには、一日中歌あり、ニュースあり、ドラマあり、万才ありで彼等の心の安らぎになっているのである。又これらラジオのはじまる朝と夜の終りには必ず国歌が流れ、神聖であり、正に王国という感じである。この国歌については、吾々がラオス国内の映画館に入ると始まる前に必ず、この国歌が流れ、一同起立して、正面に映る〃国王〃の大画にしばし黙禱をささげるのが常となっているのである。

（千葉県立山武農業高等学校教諭）